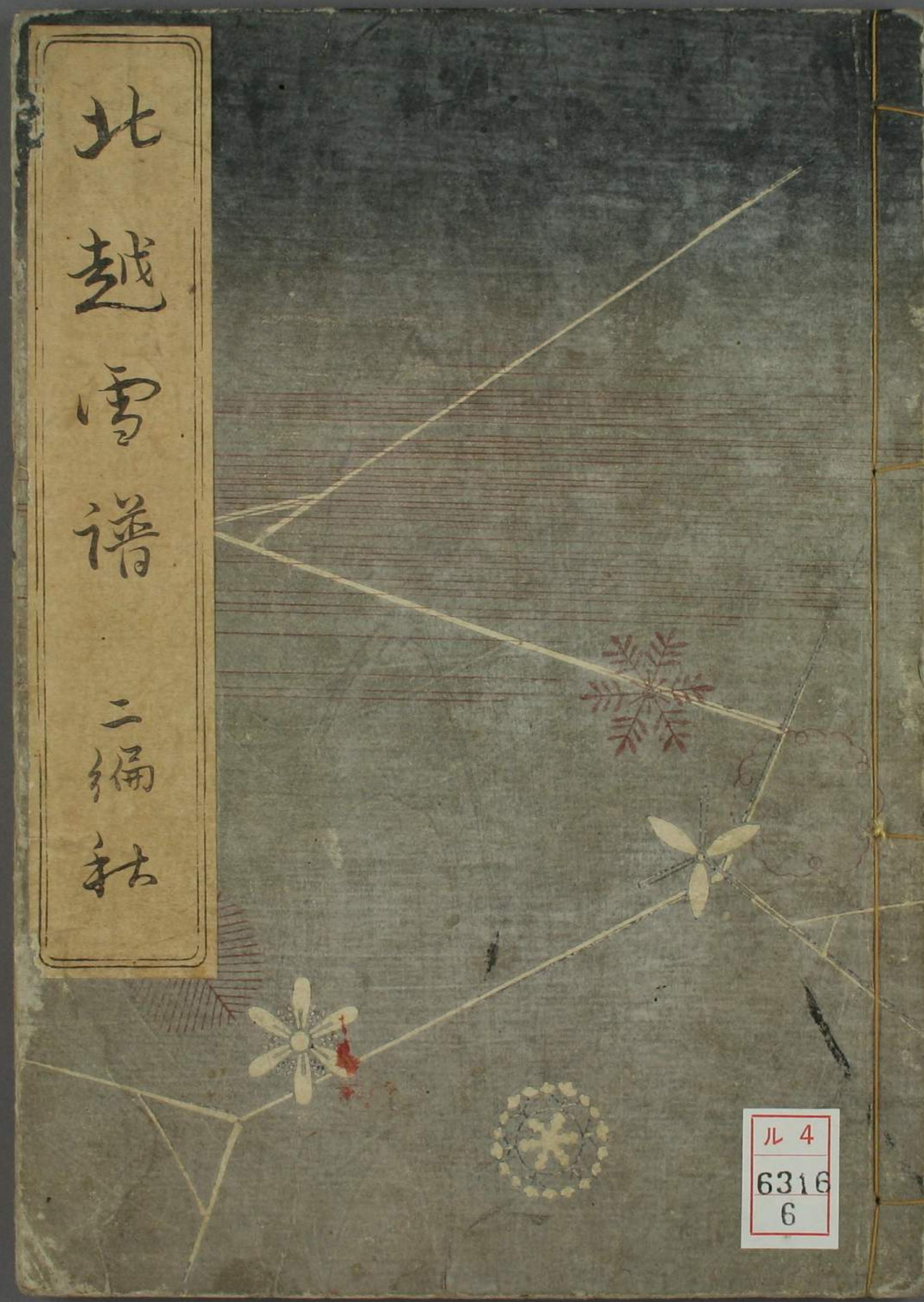
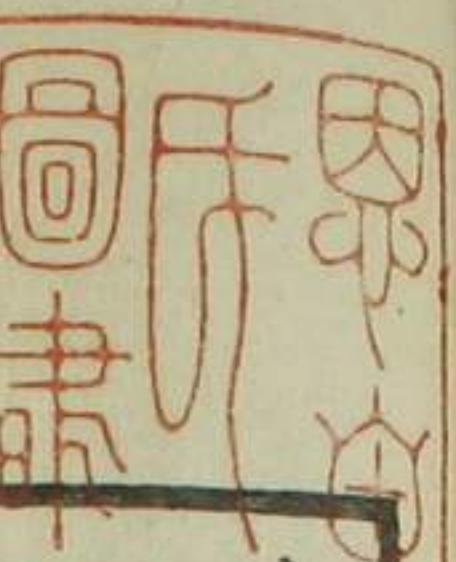


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Tama





北越雪譜二編下卷

目録

雪霜

萩野藏

○鳥追櫓

順列上下小

○地獄谷の火

○無縫塔

○年賀の哥

○菅神御傳畧

○異獸

○弘智法印

○白鳥

○浮嶋

○美人

○越後の人物

○北高和尚

○逃入村の不思議

○田代の七ツ釜

○火浣布

○兩頭の蛇

○土中の舟

○石打明神

○蛾眉山下の標準

○ 苗場山

○ 三四月の雪

○ 鶴恩小報也

通計二十三條

北越雪譜二編卷三

越後 鈴木牧之 編選

江戸

京山人百樹

増修

○ 鳥追櫓

農家市中正月の行事小鳥追との事あり此事諸國にも
あまび其あを處其國ふよりてまもぐる事ハ諸書小散見せり江
戸の鳥追とりは非人の婦女音曲を女太夫とて木綿の衣服を
うづくく着き顔を粧ひ編笠をかむり三弦小胡ちうどを
ある賀唱をすくらうくらひ門く小立て錢を乞ふ此事元日よ
りちどり松の内をまくとも松をまいてもあつて所もありとぞ我
越後少、小正月の十五日下をすちどり鳥追櫓とて去年より取除を
たる山あそ雪の上小雪を以て高さ八九尺あるハ一丈余少し高さ小

應^{おう}ト^{とく}末^まを廣^{ひろ}く雪^{ゆき}ふ^く櫓^{やぐら}を築^{つき}立^{たて}と^と登^のぎ階^{はし}を雪^{ゆき}
作り頂^{かみ}を平坦^{へんたい}小^こさ^く松竹^{まつたけ}を四隅^{よのづの}小立^{こだて}を張^{はり}と^と度^す心^{こころ}内^{うち}
ふ^く居^ゐび^ゆ小^こむし^{むし}をあきらめ^{あきらめ}小童^{こども}等^ら小^こわい^{わい}物^{もの}を喰^くい
あ^そべ^そる^る遊^ゆび鳥追哥^{とりおひ}をう^きす^すもの一つ^{ひとつ}小^このそり^{そり}や^やど^うも^もつ^つて^き
と^とあ^そぬ^ぬの^のふ^くも^もう^うて^てき^き、^とあ^そ小^こをり^りて^ても^うて^てき^き、^とあ^そを^をぬ^ぬべ^べ
あ^そく^くき^きこ^そそ^その^のそり^{そり}も^もな^なち^ちや^やぐ^ぐき^きわ^わの^の止^止か^かう^うら
の^のさ^さう^うた^たの^のそり^{そり}、^とあ^そても^{とも}も^もめ^めと^とど^どり^りな^なち^ちや^やぐ^ぐき^きわ^わの^の止^止か^かう^うら
あ^あひ^ひか^かの掘^か揚^あげ^{あげ}雪^{ゆき}をも^もの^の上^う小^こ雪^{ゆき}を以^もう^う四^よ方^{がた}堂^{どう}を作^つり^たた^て雪^{ゆき}
ふ^くく^く物^{もの}をあ^そび^び棚^{たん}をもつ^つて^てり^りも^もう^うろ^ろをあ^そび^びね^ねあ^そび^びせん^{せん}せん^{せん}ね^ね
此^こ雪^{ゆき}の棚^{たん}ふ^くく^く物^{もの}を煮^い燒^やく^く一^{ひと}濁^{にごり}酒^{さけ}う^うど^どの^の小^こ童^{こども}大^{だい}勢^{ぜい}雪^{ゆき}の堂^{どう}ふ^く
と^と遊^あひ^あ同^{おな}音^{おな}小^こ鳥追哥^{とりおひ}をう^きひ終^{おひ}日^ひ小^こゆ^ゆま^まして^{して}遊^あひ^あひ^あも^もあれ
暖^{あた}國^{くに}ふ^くく^く正^{まつ}月^{つき}あ^そび^あそ^び此^こ鳥追櫓^{とりおひやぐら}宿^{しゆ}内^{うち}ふ^くく^くつ^つと^とく^く作^つ

黨とうてもそぞ

○雪盤

前よりもともと北國中よりて越後ハ第一の雪国すりもの
中より魚沼古志頸城の三郡を大雪とも毎年一丈以上の雪中ふ
冬をうそども寒き氣江戸ふさぎふる更うと江戸ふ寒中せ
人より五難組ふしつて霜ハ露のももと所ふと陰うり雪ハ雲丸
うそ所ふとて陽うりとももづりかる雪中うそども夏の備ふ
時より野菜のあるまゝ雪の下ふ崩しゆくもの用をうそも支ひをきと
えゆきのたゞひあまども暖国ふくらむ更うそも遲きと云三月ふ
ちゞめて梅の花を見五月の丸茄子を初物とも山中ふしつてふ
山櫻のさう四月のまゝ五月ふしつて所もあるうり

○地獄谷の火

此書の前編上の巻雪中の火といふ条ふ六日町の魚沼西の山手ふ地中より火の燃る事をあざめ地獄谷の火の度どりめをああ小ちくい。かと我越後小名高きよくい七不思議しおかぞくいふ蒲原郡如法寺村百姓莊左門七兵衛孫六家おも地ぢ翁おきなが家おある地中より燃る火ハ普く人の知し所ところ其火よりも盛大さわ大だいハ魚沼郡のうちもの小千谷の在地獄谷の火ひ唐土とうど小夏えを火井ひいとて近來此地獄谷小家を作り地ぢ火ひを以つて湯ゆを燶あ客きを待ま浴おも夏秋かきうのそそれまで遊客ゆう多く此火井他國ほか多多く越後え多多く先年蒲原郡の内或家ある井いを掘あふ其夜醫師ひじ來らりて井いを掘あふを聞家ある飯ごはん時挑あ灯とうを井いの中なか入いきそのああくく井いを見み立たきく井い中なかより俄お火ひをひく火勢ほせいきんきん火ひああぐりけけ近ちか隣となりのものもの火事ひじをを見みつつけけ井い中なかより火ひののをを見みて

此井を掘あふを此火ありとて村のものもの口く小主人しゆじんを罵のり恨うらいい主人しゆじんも此火をもとともと埋うめめ此地ち火ひ一小少陰いん火ひといふの如法寺村の陰いん火ひも微風びふうの氣きづづ小發燭つけぎの火ひをもとともと風氣ふうき手て小應こひきて燃もと陽よう火ひを得と小燃こねんも寛文かんぶんのの庄左門じょうざもん如法庭ゆうほうてい小舖こうばを立たひたる時ときより燃もとららとと前まへ小井こい井い中の火ひも医者いじが挑あ灯とうを井いの中なかににののをを・ままと又頸城郡の海邊かいへん小能生宿このうじゆくといふ北陸道ほくりくどうの官路くわんろ此宿この山さん小入こいり更二里ふたさと小間瀬口せんせくちとの小村こむらありこの農家のうか小地ぢ火ひをもとと變如法寺村の地ぢ火ひ同ひととと此やよ用もち水みずをを得と變かありある時とき井いを掘あふ横よ小堀こぼり水みずをを得と變かある時とき井いを横よ小堀こぼり旱ひののをを・山さん小就こすききををとと小炬こひきを用もち小陽よう火ひを得と陰いん火ひ忽すこち狀じょうああぐり人ひと是これ爲あ小燒死こひきけと是等これらの支さどどををののをを小越後こえのうちうちああ地ぢ

廣雅二編卷之二

卷之三

火をひくも火脉の地あやをひきご陽火を得えて發せざるものあり

百樹曰余小子谷やあら時岩居余小地獄谷ぢごくの火ひを見せんと
社友五人よを伴ともひ用意よういの酒食しゅしょくを美奴みの二人ふた小荷こりめ余ち京水きょうすいと同
行ゆき十人じゅう小千谷ちやくをもぐまと西にしの方ほう・新保村しんほそん・敷川ひらかわ新田しんたあとひの村むら
を歴へく一宮いちのみやといの村むらふひづる山間さんかんの篆畦てんせき曲節くせつて茲しづ小抵こづ行程こうけい一里半
可ぞうり是日ひ、ことふ快晴かいせいて村落そらくの秋景しゅうけい百逞ひゃくとう目めを奪だつふまそ平山ひらさん
一ツを踰こえく坡さかあり則さも地獄谷ぢごくゆづるの徑きみちあり坡さかの上うより目めを下させ
一ツの茅屋もやあり是本文ほんぶんふりて混堂もんどうあり人ひと坡さかの半まより下さりて時
茅屋もやの樓上ろうじょう小四五人の美婦びふあるとむの檻はなわふたりて遙とほかの
人ひとを指さすありあひ、笑わらひあひ、名なをよびあひ、手てをうちたき
あひ、手てをあげあげまわまわ四面皆みなま山やま老樹鬱然ろうじゆぜんとて竊塞もくさいの

中少個美人を見ること考狀一星裡小あもんばううべ狹さん
といひけまば岩居友よもと相顧手を拍て笑ふこと小千谷の下
町といふ所の酒樓ふ居る酌株の哥妓どもうり岩居朋友と計り
竊小此ふ招もまそ余ふ興きん為とぞ渠ハ狹ふあもぞ一岩居
ふ魅まとよるうり已ふ地獄谷ふてうり皆樓ふのがまうり岩居ハ余と
京水とを伴ひてかの火を視せしも・そもそも茲谷ハ山櫻まうり
やゑ櫻谷とよびるを地火あるをすうて四方五十歩六尺を歩きゆをひきみて
平坦の地とく地火を借りて浴室とく人の遊ぶ所とせしとぞ
櫻谷とよびる処地火のため小地獄とよびくこと花ひまど一謫墳
くるべ。さてこの火を視るふ一つの焼き井を作りてその井中
より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛り上ふ金あり一間
四方の湯槽あり細き筈あり后の山の清水を引き湯槽小も

とを湯ハ槽の四方溢あふきもつとをあり此湯温ぬるいど熱あつくす
天工うちうの地火盡つく了時ときかひとび人作の湯も盡つくる期こ見みゆも清潔せいけつ
ある事ことひよびよど此混堂むらわ小續つづきき厨處くりばありあり灶かまも穴あなありあり地
火ひを引ひく物ものを烹なま薪いん小同どう次つ小中なかの間まありあり床ゆの下すより竹たけ筍ねぎを出だ
一ひと口くち一寸一寸を引ひく銅どうを鉗はさて火ひを出だききむ上うより自在じざいをさげ此火
小酒ちやくの烟けんをううあひ茶ちやを煎せん夜よ燈とう火ひををきき此火ひを視みふ
筍ねぎをととくこと一寸一寸をううの上う小燃もろ扇おうぎをあひあひ陽よう火ひのざざくく小
消き了とう筍ねぎの口くち小手てをあてあてううひふひふ風ふうをううのを數燭すうぎょくの
火ひを翳かざせば忽然こうぜんととあることことトトめの如ごと主おの翁おきなが曰いこの火
夜よハ晝ひよりも燥烈さくれつく人の顔青おもくあるととア翁おきなが妻水つみのうち
よりりある火ひを見せやさんとと混堂むらわのううふふ僅まごの山田やまだある所
ひひり田たの水みずの中なか小少すくな一い湯ゆをううある小つけぎの火ひをううし

小水中の火蠟燭の如き如一差婆がいふく此火のやうふりゆ
处やうみもあり夜ふひまごとく火をひゆもれ歎きまづと
りて余が江戸の目めへ視る所とぞ 奇妙うり唐土み此火
を火井とも博物志或は郷邦代醉ふ見えする雲臺山の火井も
此地獄谷の火のごくうきども事の甚大うる此谷の火ふ勝らば
唐土と日本とをあくまでも火井の最第一とひづて是を見る事
越遊の一奇觀うり唐土ふ火井の在す所北の蜀地ふ屬を日の本の
火井も北の越後ふ在り自然の地勢ふとよさん・さて一人の
哥妓梯上ふひでてもううふ岩居を呼ぶよまと樓ふのやまと
余ふ京水とくもふ此湯ふ浴を樓上ふハ早く三弦をひりせり浴
をひりく樓ふのやまと既ふ杯盤狼藉たり嬢娘哥妓袖をつね
素手弄糸朱唇謡曲迦陵頻伽の声外圓如芥の色真を添ふ

地獄谷遽然極樂世界とぞあり此妓どもを養ふ主人もあら
 來り居て從る料理人ふ具一う魚菜を調味ませくさく小
 宴を開く是主人俗中ふ雅を挾んで恒ふ文人を推崇也ふ是
 日もとふ來りて余ふ面識あるを岩居ふ約せりとぞ此人観る
 ゆゑ自ら双坡樓と家号をその滑稽此一をりて知りて飄逸
 酣落小へくすく入ふ愛せしむ家の前後小坡ありとぞ双坡の字
 下一得て妙あり双坡樓扇をひいて余ふ句をもふ妓も持て
 扇を出せ京氷画をかへ余即興を書をこゝを見て岩居を
 そぞらちの壁小句を題へ更小風雅の真をもすりて
 や日も傾きけしがのうりこまへあまたとぞ見せるを寧く
 りとくそまくらべのうりこまへあまたとぞ見せるを寧く
 そまくらべのうりこまへあまたとぞ見せるを寧く

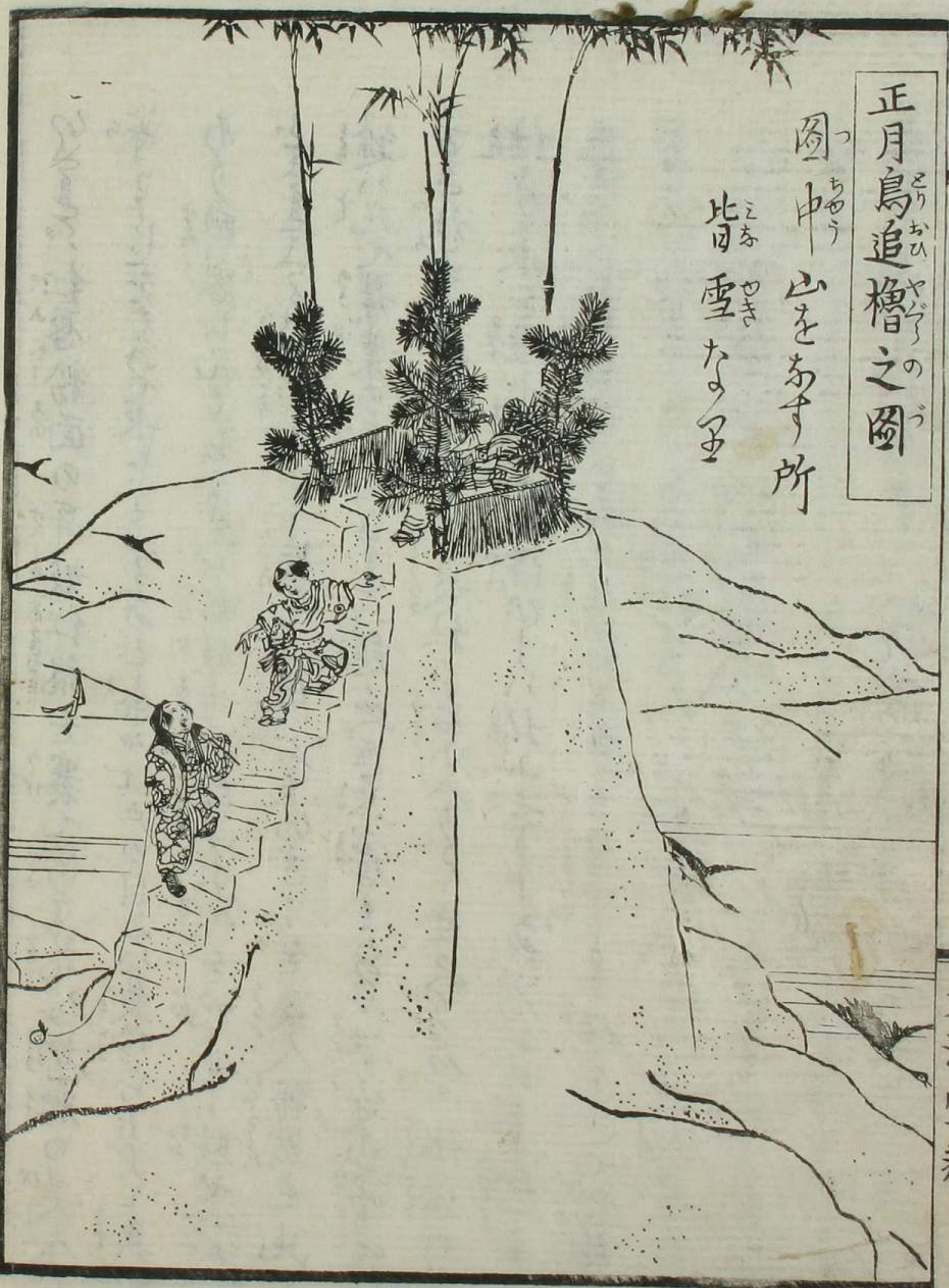
いとよだ紅唇粉面の哥妓紅褪を褰て涉了花姿柳腰の美人
 等口じをそひて水をこするうご余が江戸の目め最珍らへ
 あり醉客ぢんくをうへバ醉妓歩く躍る古縄を蛇と駭せば
 どよきくの妓憐り片足泥田へみのまへを衆人駭然と此
 途ハ凡て農業の通路あはれ一妓社の后小入りて立つて石の水盤の
 沢する水を僅小掬手を洗ひへ私小去りてあんそのまゝ樹下小
 古き社小入りてやもへ一妓社の后小入りて立つて石の水盤の
 沢する水を僅小掬手を洗ひへ私小去りてあんそのまゝ樹下小
 立せ玉ふ石地藏井の前小並びにちきく懷中より鏡をせて鉛粉
 のどろをすくつくりの唇紅をまとて粧をあらそこまくの粧具を
 う小石佛の頭ふ置く外面女井内心如夜叉のいよいよあまび井ハ
 あふとあひ玉さんとおひのう日も下晡さればかのくゆを
 ちりく小千谷へうりき

此紀行別本一本あり吾々
 北越旅談ふをも

正月鳥追櫓之圖

圖中山をあす所

背雪なよ



○越後の人物

板額女ハ加治明神山の城主長太郎祐森^{さち}室古志郡の産あり又三歳の小児も知る酒顛童子ハ蒲原郡沙子塚村の産今猶屋敷跡あり始ハ雲上山国上寺の行法印の弟子あり玄翁和尚ハ伊夜彦山の麓箭矧村の産あり近世小^さひづく徳僧高儒和哥書画の人あり小^さあざきども遠く四方小雷名セスモ^{（画人吳俊明のち江戸小）}近年相撲小越海鷺^{（さかな）}濱ハ新泻の産九紋龍ハ高田今町の産^{（萬葉と一）}次弟濱の産也常入ゆく力士の聞えありハ頭城郡の中野善左門立石村の長兵衛蒲原郡三条の三五右門是等無双の大力ゆく人の知る所あり又鎧泻^{（よろひが）}小近き横戸村の長徳寺谷根村の行光寺も怪力のきとえたり此人ハりづきも獨^{（ひとり）}て鐘を軽く掛^{（け）}てちるやぶの力ハ有り人々あり又孝子ありハ^{（おき）}一ハ村上小次郎新發田の菊女頭城郡の僧知良近^{（く）}ハ三鷗郡村田

村の百合女百姓伊兵衛^{（いわせ）}新發田荒川村門左門百姓丑之助^{（うのすけ）}塙原の豆腐賣春松^{（せん）}兼久^{（かねく）}蒲原郡糸迦塙村百姓新六^{（しんろく）}孝子の名一國ふ高かりき今存^{（そん）}在^{（ざい）}も有りとくや

百樹曰余越後小^{（こ）}ひてハ板額ありハ酒顛童子の旧跡をもたゞ^{（あら）}新泻をも一覽あり名の聞える神佛をもをがみたてまつり寺泊小のこう順德帝の鳳跡義經夢因國師法然上人蓮上人為兼卿遊女初君等の古跡もたゞ^{（こ）}ひ小越後小入りそのち氣運順を失ひ年稍儉^{（やせ）}穀の價日々小躍人氣穩あり心歸家小あり風雅をうしうひ古跡をも空^{（むな）}過り惟平^{（ひら）}くる旅人とありとくきてあびる文雅の人をも刺向^{（さむけ）}今小遺感あり嗟乎年^{（ねん）}の僕せ^{（せ）}をりんせん

○無縫塔

蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗より此寺の近く小川あり早出川とのふ寺より八町むすり下小觀音堂ありその下を流る所を東光ヶ淵といふ永谷寺へ入院の住職あるが此淵（血脉）を投げ入る事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石ふるぎ圓（まる）き自然石を一岸小出も是を無縫塔と名づけつゝ此石出とばその翌年ふく必ず住職病死する事むづりより今ふくづり一度も違ひよる事あり此墓石大小ふよりて住職の心小應せも淵（くせ）がその夜淵逆浪（さかうなう）と住職のうちも石を淵小出へたる事度もあり先年凡僧（がんそう）小住職へ此石を見て死を惧（おそ）り出奔せ（しゆへんせ）小翌年他國へあらずて病死せ（しゆしび）とぞかずより此淵小灵（みやび）あり天然の死を示（あらわ）せる所である。友人北洋主人（蒲原郡書をよこす）件の寺を覗（のぞ）むる話小本堂間口十間右小庫（くら）裏左小八間（はっけん）小五間（ごくわん）の禅堂あり本堂ふくづ坂（さか）の左り小鐘樓（しゆうろう）あり禅堂のうしろ小蓮池（れんち）あり

上小坂あり登りて住職の墓所ありかの端より出でて右圓石を人
作の石の臺の脚あくのまく墓とも中央あるを開山とす。左右ふ次
第ノノサ三基あり大さハ徑リ一尺二寸六寸六寸六寸六寸六寸
あり大小ハ和尚の徳小應ぞといひてよとぞ臺の高さハづきす一尺
もくちりうりと語らまきかの洞ふ冥ありとくづむ。永光寺のや
とり小貴人何某住玉ひい小ちの内室色情の姫ゆく夫をうるを東
光ヶ淵小身を沈め冤魂惡竜とありく人をうるをしを永光寺の閑
山名をきく血脉をうの淵小あづめて化度ト玉ひゆゑ惡竜得脱あ
その礼とくかの墓石を淵ふいびく死期を示モ是以今ふいびくて
も入院の時ハ淵小血脉を沈むと寺説ふつてよとぞ。さてまく我が隣國信
濃ゆも無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふゆく。前編靈信濃國
高井郡湯村横井温泉寺の前小星河とく幅三町をうりの大河

あり温泉寺の住僧延化の前年小此河中へ何方よりともう一高さ
二尺をもうある自然石の方小こまうつすき石塔一つ流しきて実に
彫刻せることなく天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へも
せら事ありまくらく翌年住僧延化あり別處へ小此石を立了九代
以前より始り一が代々九代の石塔同石同様多く少くも違はず並び
あり或年の住僧此塔の出でる時天を舞へての我法華千部讀
經の願あり今一年ふと満り何とぞ命を今一年延一玉と念
ふてこの塔を川中の淵へ投げたり何事もあく一年すぎ千部
讀經のすま一月小件の石又川中へあらはく其翌年もとて延化
ありとその次の住僧塔のひどる時何の種がひもかく淵へ落してす
幾度うげあがて其夜七のよふて翌年病死あり一とぞ
此辺みくに是を無帽塔と名づく以上一條全文越後小永光寺信濃小温泉

寺事の相似する一奇怪といふ。百樹曰牧之老人が此草稿を視
て無縫塔の縫の字義通ドガフ譯字ふやとて剖示し問ひけ
きぶ無縫塔と書傳するよりひく一ぬ雲根志み無帽塔とあり
無帽の字も又通ドガフとぞくは無望塔ふやあらん住僧の
心ゆハ死がひやく小無望塔うづーと小無誓の一笑を記し博
識の確拠を缺つ

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一あり四大寺と云滻谷の
慈光寺ト村松ト村上の耕雲寺伊弥彦の指月寺雲洞村の雲洞庵
あり十三世通天和尚ハ霜臺君の謙信の事親籍ゆく高徳の聞え
今も口碑ふのとより景勝君も此寺小物学び玉ひーとぞ一国の
大寺うむ古文書宝物等も多ーその中小火車金かく落の袈裟と

りふあり香深の麻と見えやう小血の痕のこもり星を火車落とく
宝物と見て由來ハモリ天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひ
学徳全備の尊者モリモセリ其頃此寺小ちう紀三郎丸村の農家
小死亡のりのあり小時一月冬の雪ありべき雪吹もあざりけ
三四日ハ晴をまちて葬式をのぞリ小晴ざりタモリ強そゆとある
をモリ且那寺あさぶ北高和尚をもとゞ棺をひく親族ハさる之
俄小ぢう黒雲空よ布滿て闇夜のごくづくともろく火の玉飛来り
棺の上小覆かづり火の中小尾ハキシタキ稀有の大猫牙をあらヒ
人く蓑笠小雪哉あきを送りゆくの雪途も半小時にし時猛風
鼻をすき棺を目づくとくと人くことを見て棺を捨あけり
まろびつ逃まどふ北高和尚ハモリも惧るひろく口小兜文を唱
大声一喝一鉄如意を舉そ飛つく大猫の頭をうち玉ひく小から
や破きほん血やどり一里も衣をけぐ妖怪ハ立地小逃去りけ
まご風もやと雪もをみて事あく葬式をひとあきりと寺の
旧記ふのことより此時めくるを火車きの法衣と今ふくふ
百樹曰余越遊一塙澤ふ在一時牧之老人小伴とく雲洞庵小
いづり塙澤より庵主ふも對話あくかの火車ひとの蓑笠とりの物
その外の宝物古文書の類をも一覧せりりふあむ大寺あく祈禱
の二字を大書一う堅額ハ順徳院の震筆あらとぞ佐渡へ延
震筆門前小直江山城守の制れあり放火私伐を禁するの文あり
庭中池のあとう智勇の良将宇佐美駿河守歿死の古墳在り一を
先年牧之老人施主として新小墓碑を建すり不朽の善行を
りふべー本文ふ火車といふ所謂夜叉うづ一夜叉の怪ハ
○年賀の哥

余六十一還暦の時年賀の書画を集む吾国はまくあり諸國の文人
三都の名家妓女俳優來舶清人の一絶をも得たりまみ牧之が贈と
いふ吏をもまくすあり入より入ふりて千餘幅ふゞぐり帖となつて
藏をひくせ是を風入ともする鋪ふづぎたる坐しきの障子をもくき
年賀の帖を被き並べきよる所友人來り年賀の作意書画の評
あどこりゆるをりしも順礼の夫婦軒下小廊下とり立すり吾が家
常小草鞋をつゝせむをから者小施をやゑそとをも錢をわづへ
此順礼の翁立まつてどうもよつて年賀の帖を心あるまふ見ゆるが
云やうかすゞもあづくらも順礼の腰をまく成申さんたんざく玉ひ
とりひも食のやうあるをどごく似氣うれあくそのむがつるやと思ひ
きく短尺もぞうをといづけまく

三途川より先百年も君がむづひをとぶめやまん

五放舍

とまくするあそびをひも拙くも年賀ゆかむとくからりも取
趣向とむか順礼が五放舍と戯きてる名もすくろく友人と俱ひど
ろを感ト宿を施行せんやくりのびうせんあど友人もさぬくふ
きめこれど杖をよみがへて立まつりけり國ハ西国とぞうりじうりひ
うりのふてやありけん

○逃入村の不思議

小千谷より一里あまりの山下小逃入村といふありゆげ入りを里俗此村が大
塚小塚といひ大小二ヶの古墳双びあり所の傳ふ大さうを時平の塚に
小さうを時平の夫人の塚といひ時平大臣夫婦の塚此地小在づき由縁ゆき
こと論ふがどる俗説ありあくとも爰ふ一つの不思議ありちのじ
ぎをかづばむつ時平小やうりの人越後小流域をあどて此地が終り
するやあくんちの不思議といひへ昔より此逃入村の人手習をもまく

北高禪師勇氣圖



天滿宮の崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷ふ身を寄て手習
を主とし崇ありありとども村ふくに日を追ふ字を忘る終ふ無筆
とあるこのゆゑふ文字の用あり時ハ他の村の者ふたのにて書用を争ひ
又此村の子どもきど江戸土産とて錦繪をりひゆ中ふ天滿宮の繪
あまびうゆきど神の崇りの兆ありし事度くさむびかの大
塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くりひつてゐる何り由縁ある
事うるべ管家の枕紫みて薨ド玉ひづハ延喜三年二月廿五日あり
今を去る事百樹曰くふ今とのひへ牧之老人が此ちうぎ一から文政三年をひづり九百十五年前あり今ひづり
ても神灵の明くたる事あらうべ尊むべこそ又こよぶるものを事
あり南谿さくはが東遊記を見す小南谿東遊津輕ふ居す時六七日も
風雨つきうち所の役人丹後の入や居ると旅店毎ふまびをたゞけ
ゆゑ南谿あじふそのやゑを問ひけまびあすドひづや當国岩城いわきハ人の

あらうる安壽姫對王丸の生國ありまどむの入此御あらを岩城山
の神アラ小まつりアラ社今アラ小在り此兄弟丹後アラふさるよアラ三庄太夫アラが為アラ小惱苦
するゑアラ小丹後の人アラひまきアラ丹後の人此國アラふ入アラバアラ大風兩有て
日アラをこアラ事アラよりアラ丹後の人此國アラの塙アラをいづアラ大風兩アラなアラ
まもアラむアラ小丹後の人アラ居アラと搜アラをうりアラとアラ南谿子アラ此事アラ遇
うりアラ記アラ右アラひの兄弟アラの父岩城判官正氏アラ在京アラの時アラ謫アラ小あひアラ
家の亡アラびアラハ永保年中アラの事アラ今アラをさアラ事アラそアラ七百五十余年アラ
兄弟アラの怨魂アラ今アラ消滅アラせざアラ事アラ人知アラを以論アラ百樹晏壽アラ對王妻アラあほ塙尾
西遊記アラ前景清アラ塙アラ日向アラ小あり世アラの知アラ処アラ其母アラの塙アラ肥後國永麻
の人吉アラの城下アラより五六里アラわど東切幡村アラふすアラ此所アラ小景清アラ娘アラの墳アラ
ありアラ一村アラの氏神アラ小まつアラ此村アラいだ盲人アラを忌む盲人アラ他處アラより入アラ必
崇アラあり景清アラ後アラ小盲人アラふすアラしやゑ母アラの冥亡アラ盲人アラを嫌アラとアラ所アラの人の

リト記せりこゝの史逃入村の不思議小類せりあらまごと件の
ニツハ社ありて丹後の人を忌墓ありて盲人をきらふあり逃入村より
墳ある也る小天滿宮の神灵此地を忌玉へあんぞをりて考ふる
かの古墳ハいよ＼時平が血脉の人すべ

百樹曰余越遊して小千谷ふ在りて時所の人逃入村の事を語
りての古墳を見玉へ案内すとひづれど菅神のひも玉ふ
所へ文墨の者強くや／＼ぎふもあく種話をまづのひもくや
ぎりききて 天神様とりバ三歳の小児を尊び時平とまけば此
御神を讒言一たる悪人ありとく其惡千古ふ上下にて哥舞妓
狂言ふも作りみて婦女子も普く知る所あり童稚女子ハその
實跡をもとすが稀ありまづがからむちう記冊子小此
御神の事を記そひよすかとけほど逃入村の因小よりそく小

書載モ

○謹で案る小菅原の本姓ハ土師あり／＼土師の古人とひづ
光仁帝の御時大和国菅原といふ所小住するもも土師の姓を菅
原ふ改らる菅神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼とやなてす／＼阿呼
余が考あれす文仁明帝小仕玉ひづる文章博士參議是善卿の第三の
御子兼和十二年ふ生玉り七歳の時紅梅を御覽／＼梅の花
紅脂のつらゆ似て阿古が頬ゆもゆ／＼十一の春齊衡父君
より月下梅とひづ詩の題を玉ひす時即坐小月輝如晴雪梅花似
照星可憐金鏡轉庭上玉房馨 御祖父公清御父是善の学業
を受嗣玉ひて文藝ハきくあり武事ゆも疎くもぞ／＼

○清和天皇の貞觀元年御年十五ふて御元服同四年文章生小
拳らと下野の權掾ふうせらる同十四年御年サハ御母伴氏身

すうり玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まろ
玉(り)御年六十九此時管神ハ御年四十一(り)寛平四年御年四十八
類聚国史二百巻を撰ミ玉ふ和哥ハ管家御集一巻詩文ハ管家文章
十二巻同後草一巻(後草ハ鏡紫)その御作今も世小傳み大納言公任卿が詠集小
入とてある管家の詩小「送春不用動舟車」唯別殘鶯と落花
若使韶光知我意今宵旅宿在詩家此御作ハ延喜帝のまご
東宮(うきやう)アリ時令官ありて一時の間小十首の詩を作り玉ひする其一ツ
あり○まえ御若年より數階を歴ひて後寛平九年御年五十三
權大納言右□將を兼らる此時時平大納言小任せと左□將を兼
管神と並び立テ執政アリ此時大臣の官ありしゆゑ大納言もて執政
アリ此年七月三日宇多帝御位を太子敦仁親王(讓り玉ひ朱雀
院入らせ玉ひ亭子院とヤ奉り御法体アリテ寛平法皇とぞ
ナ奉了敦仁親王を醍醐天皇と後アリ延喜帝とモヤ奉了
御年十三年号を昌泰と改元を同ニ年時平公左□臣管神右□臣
相俱小帝を補佐一奉らる時小時平公二十七管神五十四兩公
左右の□臣とどゞ方徳年齡双璧をあまび故小心齟齬トモ相
和セモ是管神の諱毒を得玉ふの張本アリ○そも時平公
大職冠九代の孫照宣公の嫡男ふと代々□臣の家柄アリの
アリモ延喜帝の皇后の兄アリこのゆゑ若年ふとて□臣の貴
重小職トアリ此人の乱行の一つを言バ叔父だ大納言國經卿ハ年
老叔母アリ北の方ハ年若く業平の孫女ふと絶世の美入アリ時平
是ふ憲モ夫人もまた夫の老アリを嫌ふの心アリ時平或日國經の
許ふ宴一醉興ふまぎアリ夫人に貰ひんとのむを國經も醉
しまだ戯言とかひひアリ夫人を見て叔

母を車ふりまき入まく立まく世腹ふ生まつるを中納言敷忠と云
時平の不道此一を以て其餘を知づてから不道の人あまび
寛平法皇の御帝の御心ゆく時平の任を除き 菅神御一人小国政
をまくせ玉ひんとのもがくめあじ小延喜元年正月三日

帝亭子院へ朝覲のをりまく御内心を示す玉ひふ 帝もあ
まく小延喜が玉ひ其日 菅神を亭子院ふりまく事のよーを
内勅ありす小 菅神固辞しなまひふ許す玉ひざりけり
同月七日後ニ比密事ひふて時平公の聞ふうまく事ふ先
位ふを玉ひ比密事ひふて時平公の聞ふうまく事ふ先
帝ふ諱ちむハ君の御弟齊世親王ハ道實の女を室
竈遇厚一 是以君を發す親王を立國柄を二人の手
小握んとの密謀あり 法皇も是ふ應ド玉ひの風説ありと
言を巧ふ諱すけり 時小延喜帝御年十七より 皇后ハ

時平公の妹あまび内外より諂ひ毒を流れて若帝の御心を動く
奉りまくあり○さて時平が毒奏ふゆゆ中りて同月廿五日左降の
宣旨下りて右□臣の職を削り從二位ハリムのどく太宰權師と
文鏡紫へ左遷ふ定め玉ひり 寛平法皇此事を聞一めにて大ふむ
ろをぬ御車ふもや一玉ひも俄ふ御沓をそぞら玉ひて清涼殿
小立せ玉ひ斯とヤセトモをありしうとも左右の諸陣警固して事
を通せど是も時平が諂ひ一味もる菅根の朝臣がちふとく
法皇ハ草坐玉ひ終日庭上ふ御一晩ふりすまく本院へ還口
玉ひの菅神ふ御子二十三人もせり御男子四人八方(流)玉ふ
是も時平が毒舌ふよまく姫うちへ都ふりすまく幼きふりすまく鏡
紫(あさご)かく年頃愛玉ひる梅ふまく別ををすまなまひく
東風吹く匂ひをそよ梅の花主すとえ春か忘れ此梅つゝ

飛^とる事^ハ舉^よ世^の知^し處^{アリ}又櫻^を桜花主^を忘^ミね^マのう^ハ吹^ス
そん風^{ふう}とつて^{ハヤシ}斯^ハて延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の
御館をりて玉ひて津の國須磨の浦小日を移^シて^ハ抵^リなま^ハり
せきをあひすを須磨の日記^ト今も世^ハのこま^リ一説ふ偽書^ト○筑紫太宰府
ゆく 離^{レバ}家^ヲ三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時^ニ仰^ヒ彼^ヲ
御哥^ハタざま^ハ野^ム山^ム立^ハ烟^リあは^シよりことりえま^リけ^レ
又雨の日^ハるの朝^カく^ミ人^もう^ハま^スやま^スぬ^ミ夜^ハり^モあ^ミ
お^はき^シか^くの^シ室^の○つ^トふ^ヒ玉^ひて^ハ不^出門^行と^リ詩^を作^リ玉^ひて
す歩^シも門外^ハりて玉^ひて^ハ是^シ朝廷^を尊^シ御身^の謫^官下^スをつ^ミ
たり^ハゆ^きり^ハ御句^ハ都府樓^ヲ終^シ看^瓦色[、]觀音寺^ヲ聽^ク鐘^声
○管神延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫^ヘ玉^ひて^ハ八
月^{アリ}是^ハ前^の御詩文^を管家文草^とひ^ハ卷^之左遷^シ後

の^を管家後草^とく一卷今^モ世^ハつ^ハ後草^ハ九月十三夜の題
ゆて「去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨断^勝 腸^ノ恩賜^{御衣}今
在此^ニ捧持^{サハ}毎日拜^ス餘香」此御作^ハ注^モありそ^の趣^ハ。去年六
昌泰三年^{アリ}延喜元年其年^ハ九月十三夜 清涼殿^ハ時候^{アリ}
時秋思^トいふ題^を玉^{ハシ}し小詩^の意^ハことよせ^シ諫^{ハシ}た^シま^リ。其
ひきを容^{ハシ}玉^ひより^ハせめて^シ御衣^を賜^{ハシ}るを此配^{ハシ}所^ハも
す^シ毎日御衣^ハの^シた^シ餘香^を拜^{ハシ}帝^を。恨^ミ玉^{ハシ}しを知^{ハシ}。朝廷^を
忘^ミ玉^{ハシ}る御心^の誠^を作り玉^ひする。此一詩^をり^ハとも無^カ
實^ハの流罪^ハ所^ハ。露^をうち^ハ帝^を恨^ミ玉^{ハシ}しを知^{ハシ}。朝廷^を
怨^ミ玉^{ハシ}魔道^ハ入り雷公^ハあり玉^ひと^の妄說^ハ次^ハ
矣^{ハシ}。高辻の御庭^の櫻枯^{ハシ}と^キ玉^ひて「梅^ハ飛櫻^ハか^シ
世^の中^ハ小松^ハう^シこそつ^シあ^シけ^ト。また太宰府^ハ講居^ハあ^シ事

三年ミミモふとく延喜三年正月の頃より御心例ルル二月廿五
太宰府トモド玉タマ御年五十九御墓ハ府カミ四ツ辻ヨツツチといふ所
小定コトニ御棺タミをひびヒビ々途トチ中ナカニふとくまつてうごウゴぞ別ナシモちの所
葬スル奉スル今ハの神廟ジンボウ是アリ。延喜五年八月十九日同所安樂寺
小始チホ。管神の神殿ミヤを建タメる味酒アヒザケの安行アヒツキといふ人星ヒノシタをうけ
たまタマ同九辛神殿成タマニ是よりさき四人の御子配タマニ流タマニをゆゑま
玉タマ故ハシの位スカ玉タマ。神去玉タマのち水旱風雷ミズシヤウンドウの天
寢スルありとく人の心安スルぞ星ヒノシタ。管公の崇タマニうらんタマニど
風說アヒツキありとく。管神薨去タマキタマより七年ミミモ延喜九年
四月左シロ臣藤原時平公薨タマニ歳三十九又一男八条の大將保忠タマニ
弟中納言敦忠タマニ。時平の女タマニ延喜帝の孫の東宮タマニも相づきて
薨スル。又時平の諱毒タマニ荷膽タマニ。管根の朝臣ハ延喜八年十月

死スルことよりの事スルをす。管神の崇タマニ世スル流布タマニ。
管公の冤謫タマニを世人哀戚タマニ。延長元年三月保
明太子薨去タマニ。同年四月廿日贈位正二位本官の右シロ臣
小復タマニ玉タマ。神タマニ。二十年。一條院の御時正曆四年五月廿日
管神タマニ正一位左シロ臣タマニ贈タマニ。管神百年。同年閏十月十九日
大政タマニ臣タマニ贈タマニ。此御神の御位ハ正一位大政タマニ臣タマニ。
後年屢タマニ神灵タマニ赫タマニ徴タマニ。小よりて天満宮或
自在天神の贈称タマニ。醒醐天皇タマニ在位百サ代の御皇
統の中タマニ殊タマニ御德達タマニ。延喜の聖代タマニ。御在位の
久タマニしや。延喜帝とも奉スル。御若冠タマニ時タマニ。賢者タマニ
の聞スル。重臣の管公を時平大臣タマニ。一時の諱口タマニ。玉タマにて
其實否タマニ。玉タマ卒示タマニ。管公を左廷タマニ。御一代の

失徳とゆりあづきあらるを 菅神の恨ミ玉ハざレハ配所の詩哥小
てもあらず。菅神ハうもミ玉ハぞとモ賢徳忠臣の冤謫を天のい
きどりて水旱風雷の異慶讒者奸人の死亡ありしやん俗子ハ是
を 菅神の怨灵ともハ是又 菅神の賢行ふ瑾つけありあれ
ども 窮ふ謂く賢者ハ旧惡をあらむぞとなり事ふこそよき冤謫
懼愁のあまり讒言の首唱する時平大臣を肚中おなかふ深く恨ミ玉ひ
一もあづくぞ本偏からず逃入村を神の忌玉す其徵ともすの
ツカツカ。神去リ玉ひよりサ八年の後延長八年六月廿六日
大雷清涼殿ふ墮て藤原清貫きよつ大納だいのう平稀世ひきよ右中其外時候の人々
雷火ふ即死を 延喜帝常寧殿ふ渡御ありて雷火を避たまふ
是をも 菅神の崇たそとモバヒヨひ非說ひと安齋先生伊勢いせの
管像辨かんじょうべんもより太宰府より一里西小天拜山さんあり 菅神あの

山ふのやりて朝廷こうごうを怨む告文を天あめ小捧さげて祈り雷神とあり
玉ひたまひとゆハ賢徳の御心みやこころをあらざる俗子の妄說まうせつを今いま小傳さとへたす
カリ和漢三才圖かわ會ふうふも實じつ一い字じ小記こき一い字じハ不出門行ふしふぎんぎやうの御作みやく
心こころを深ふかめめるあるあくんあく。法性坊尊意さんい叡山えさんふ在あし。時 菅神の
幽うら来きり我わ冤謫ゑんちくの夙懟ゆくさいを償たまと願ねがくハ師しの道力どうりょくをりて拒うそこと
る。され尊意曰卒土そつとハ皆王民おうみんあり我わ。皇こうの詔のうじをうけ玉たまを
避さける小所こしょ。菅神かみじん怖色おそいろあり適柘櫓あてくらわを薦すす。菅神かみじん嘯なまくを吐ぬ
焰ほのをう。玉たまとゆ故事うきとと。先さきづく事こと。此書このしょハ今天保
廿年前元亨二年東福寺とうふくじの作つく。かう奇怪かいざいの事を記き。佛者ぶつしやくの筆ひ癖くせありと安
齋先生あんざいせんせい。白太夫しらたゆとゆ伊勢渡會いせとくわいの神職しんしょく。菅神かみじん文墨ぶんもく小於
格外ごくわの懇友こんゆうあり。もと北野きたのふ祀まつ。今いまも社しゃあり。此御神みやこじんの事を作
松王櫻丸まつおうばなまるの名なハ梅うめハ龜かめの御哥みやこ。北野きたのの御社みやこじの始はじハ天慶五年六月九日くわより
よりてまづけする名なあり。

勅命ふよりて建創其起りハ西の京七條小住す文子とのか女不神
説ありふよりてあり北野縁起小○世ふ渡唐の天神とりひて唐服ふ
梅花一枝を持玉を画く故事ハ佛鑑禪師聖一國師と號する名を東福
寺の開山國師号の始祖傳多小住玉ひする跡の地中より掘り出る石ふ管神の灵唐
土渡り玉ひて經山寺の無準禪師小聖一國師法を受玉ひて日本へ
歸り玉ひと件の石ふ勝つけありと古書小見えてるを拠とて
渡唐の神影を画き傳ふるあり此事固妄説ありと安齋先生の
管像辨ふり管家聖庵傳暨とりの書の附錄ふ沙門師嵩の管神
管神渡唐記あり其説孟浪小属を
左遷の實跡を載るハ日本紀畧抄錄小卷序扶桑畧記卷。日本史
百三の列傳五十。管家御傳記神統管原陳姫朝臣御作正史ふよとれば証とて其餘虛實混合
たる古今の書籍敬奉よしやまき本朝文粹えすふ舉よる大江国衡の
文小天滿自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人帝の御そんぞう或日月於天

上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也云云大江家ハ
菅原家と俱小朝廷ふ累世もる儒臣ありある小管神を崇あがめ
称する事件の文の如一是以凡文道小閑者此御神を崇あがめ
んや信せざんや○もよそ管神を祀る社やしろもいかゞ雷除の護
府けいふといふ物あり此御神雷の淳名をうけ玉ひするやゑ神灵雷
を忌玉あゆゑ此よりうゐうおど験お有あべー○さて如件條説じょうせつを
本編小い逃入村の神灵の事小因ちあわ實跡の書かきを摘要して
御神の畧傳りょうとうを児曹こども小示あらわもあり固不学むながくもあままバ要跡の
漏ぬれつゝも説の誤謬あやまちたるものありてあると謹しふりで附記つきを○再按さくげんる
孔子の聖せうあるもその灵みたまハ生る時よりも昭然さうぜんとてその墓十里
荆棘くさを生せど鳥も巢すずをむそもそを闇羽くろはの賢ひあるも死しれて神かみ
ありとお祈ね小應おこな是則生は形かたちを以もつて運うり死して神かみを以もつて運うる

雪詩二編卷之二

文淵堂藏

七ツ釜之圖



西王正日二二扇

廿一

文淵堂藏

ありと文海披沙 菅神を此論ふ近一逃入村の事を以て千
年 ふちうに神灵の赫くよること仰くべ 敬ふべ 盖冥々あハ年月を
置ぞとまけバ百年も猶一日の如くうるべ 菅公の神灵ある事あ事和漢
多大あるを云ふ

○田代の七ッ金

魚沼郡の官驛十日町の南七里計妻在庄の山中 村あり 村を去事七八町下七ッ金とりふ所あり 里俗淹づを 七ッ金とよひきてより 錐子の口不動淹りどりふも七ッ金の内みて妙景 奇状筆をりふと云ふ第七番目の金の地景を爰小圖ちるを 甚其大槻をあらべ 此所の絶壁を堅御号横御号とりふ里俗伊勢より御師の持きてるもくひ箱をちぐさきまとひ此絶壁の石うの箱の状ふ似ゆるをあつて斯ひうりそな似うりといふハ此せつべきの石うとの落すあを視とが厚さ六七寸計ふとて平ミあり長さ二三四尺をうり

長短ハひどくぞ石エの作りよふが如一此石數百万を堅ふ積重みて此數十丈の絶壁をあそと頃ハ山ふつまそ老樹鬱然たり是右の方の堅御がうあり左りハ此石の寸尺ふたびへくる石を横ふ積みて數十丈をあそと事右ふ向トものまゝ人ありて行儀トくつもあげてうごく寸分の斜カ天然の奇工奇く妙く不可思議うり此石の落たるを此田代村の者まゐぐの物小用ふ片石ふとも他所小用をとば崇あ之事度くうるとぞ余文政三年辰七月二日此七ッ金の奇景を尋て詫類を示そ○百樹曰余仕小在一時同藩の文学閔先生の話小君侯封内の丹波山小天然不磨の状もて石をつみあげて柱のやうを並べ絶壁をか満山此石あうとよまきに又西国の山ふ人の佑うたうう磨の状の石を産もう所ありと春暉が隨筆ふく見ゆる事

ありき今その所をすひびさむ

○又尾張の名古屋の人吉田重房あつ著あつ「鏡紫記行」卷の
九小但馬國多氣郡納屋村より川船ふねを但馬の温泉ゆの小抵こどる途
中なかを記き。一い方ほう條じょう小曰いわ。猶舟よふねののく行ゆ。右うの方ほう小愛宕山宮島村
野上村石山いのうむら地名ぢめいと追續ついじき。此石山の川岸がし小臨さりする所ところ奇き
石いはあり。其形かたち磨盤みはんの如ごとく上下平ひらひら。周まわりハ三角四角五角八角
等など小こて石工いはの切立きりたて。如ごとく色いろハ青黒せいくろ。是いを掘出くわいだ。跡あとありて
洞あなののく。天下てんかの廣ひろき。珍ちん奇き。事こと。是いを記き。是いも奇石きいはの一類いん。筆ひの次つぎ小こまま。

北越雪譜二編卷之三終

